
流星のロックマンF ダブルセンタース

koreel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマンF ダブルセンタース

【Nコード】

N9404Z

【作者名】

koreel

【あらすじ】

始まりの電波体オール・クリンシャン・終焉の電波体ヘル・クライシス

この二つの電波体によって、全ての空間・物質・生命が管理されている。

双方が互いに牙を向きあう事はまずありえない。

だが、弘法も筆の誤り……即ち、いくら神のような二体でもミスを起こす

何千年……何億年……何兆年と前から蓄積されてきた『手違い』

『手違い』によって、イリーガルな進化を遂げた人間や電波体が現れたのであった。本来ならば、全ての歯車が絡み合うはずだった……。

それだけでは収まらず、使徒や賢者と呼ばれる者達も現れ始めたのであった……。それが連鎖を繰り返し返し物語は動き出す……。！！

この物語に正義や悪は存在しない。己の価値観で突き進むしかないのだ。

色んな戦力がぶつかり合う中・スバルは自分の信じた正義にたどり着けるのか……。そして、本作にスバルと並ぶ主人公も動き出す……。

本作品は黒龍降臨の再構築作品です。ですが、シナリオは大幅に変更。

もっと、壮大でマシな作品に仕上がるよう努めます。

プロローグ（前書き）

知っている人もいるかもしれませんが、「黒龍降臨」
あれのシリーズの第二弾のシナリオを主に取り入れています。

プロローグ

「はっ、その程度ですか。いくらあなたが使徒と賢者の血を引いていても

所詮は成りそこない。それに、あなたの電波体は何です？

見たところ、レジエンドになりきれしていない失敗作ですか？

私の電波体は真のレジエンドシリーズだ。カプセルも5つある。」

ここは、宇宙と宇宙を繋ぐ狭間の世界。

現在、白銀の青年とやや金髪の青年が何やら激戦を繰り広げている。

白銀の青年は得体も知れない化け物呼び寄せた。

「コイツは失敗作じゃねエ……。まあ、すぐ分かるぜ！

電波変換ッ！……ゴッド・フォックス！」

金髪の青年が九尾狐タマモロマエと電波変換したのだ。

耳は後ろになびくような形でバイザーの両端についている。

特徴は鋭い鉤爪と九本の尾だ。

「フンッ！成りそこないでは勝てないと言ったばかりでしょう？

マンティコラ。やりなさい。」

マンティコラと呼ばれるライオンのような鬼のような化け物が前に出る。

そして、口から膨大なエネルギーを吐き出す。

しかし、ゴッド・フォックスは攻撃をやりすごし反撃する。

「スペルデータ転送……キツネビverB!」『グルルツ!』「果てろ。」

金色のエネルギーの塊が不規則に回ったりしながらマンティコラに迫る。

周波数変換で避けようとするが、さすがに一発は避けられなかった。掠った部分から異質な電波情報が流れる。

「フフッ！少しは出来るみたいですね。」「終わったな……。」

ゴッド・フォックスは勝利を確信して相手を見下すように笑った。当然、白銀の青年には訳がわからない。何を言っているのかと。

「おやおや、頭でも打ちました?」「てめエの電波体を見てもみる。」

すると、マンティコラの電波情報・エネルギーが石のように固まった。

そのまま、落下していったマンティコラはどこかの次元に飛ばされた。

「そうか……さすがに、あなたを見くびりすぎた。お手上げです。レジエンドシリーズは確かに強力ですが……」。

その能力は厄介だ。^{スベル}あまり、レジエンドを無駄にしたくない。今の状態じゃ勝てそうにありませんね。」

白銀の青年は、オーバーに悔しがったような表情をした。しかし、それはゴッド・フォックスを挑発したに過ぎない。

「ふざけんなよ。てめエの力は俺を凌駕するはずだ。」

まあ、初めから倒す気もねエし時間もないんだ。

そついう事なら、互いに引こつじゃねエか?」

白銀の青年は少し考えこんで、一つの提案をした。

「そうしましょう。それと、これは私の提案なのですが……。
私のレジエンドシリーズの『サンダーバード』をあなたにあげま
しょう」

そのかわり、あなたの電波体の秘密を教えてください。
私たちとあなたたち使徒族は、完全に敵同士ではないはずで
す。いや、むしろ今は協定を結ぼうとしている。

それに、この電波体は使徒系と賢者系を両方用いたものだ。
まさしく、あなたそのものじゃありませんか？」

ゴッド・フォックスの変身を解いて、携帯端末を取り出す青年。
それを見た白銀の青年も同じく携帯端末を取り出す。

「てめエの言う事には信憑性がある……。送るぜ。」「ええ……。」

カプセルに入った電波体は解放したものの従者となる。
それに、偽物であったとしても戦力増加には変わらない。

白銀の青年は、スリープ状態のカプセルを投げつけた。
金髪気味の青年も九尾狐タマモロメエのデータを送信する。

最も、情報を与えたところでコピーは絶対に作れない。
いくら完成度の高いものができてオリジナルは絶対に再現不可能。

なぜならタマモロマエには、ある秘密があるからだ。

「さようなら、カルマ君……。」「黙れ。」「相変わらずですねえ。」

白銀の青年には狙いがあった。やすやすとレジェンドを渡す訳がない。いや、そもそも彼の能力も圧倒的な力でねじ伏せれたはずだ。

「期待していますよ、カルマ。あなたには使命があるのですから……。」

そして、どこか別の世界に白銀の青年も飛んで行った。

くコダマタウンく

所変わって此処はご存じコダマタウンである。
金髪気味の青年こと、カルマは急いでお馴染みの某所へ向かった。

『ねえ、カルマー！その姿じゃまずいんじゃない？』

はっとしてカルマが止まった。服装の事だろうか？いや、普通だ。では、何がまずいんだろうか？いたって普通の青年にしか見えない。

「おっと、俺としたことが……。頼むぜ、タマモロマエ。スperlデータイブラリ追加。体質変化。」

『じゃ、始めるわよ。半電波化が終わったら後は自分で頑張って。』

何やら、怪しいワードを発したタマモロマエ。怪しすぎる……。カルマの体が発光した……。どうやら、成功のようだ。

「じゃ、体を6年前にするか……。うっ……。気持ち悪い……………」

どうやら、体を半電波化する事によりある程度肉体を変化可能らしいカルマは悶絶しつつも着実に小さくなっていく………………。そして、身長が20cm下がり体重も18kg減った。少しやせ気味6年生と言ったところだ。いや、スリムと言っておこう。

『急いで、あんまし時間ないから。ほら、後10分!』

「ん〜、少しタイムラグが発生したな。とばすぞっ!」

現在走っているわけなのだが、やはり青年の時と比べるとスピードに欠ける。他にも色々、スペックが下がっているのだ。

そしてたどり着いたのはコダマ小学校だ。朝礼まで後5分。

ここまでくれば気づくだろう。カルマはコダマ小の生徒になるのだ。

6-Aの教室に何とか、スタンバる事に成功した。

本来なら、職員室に行かなければならないのだがやむおえない。

「……………入ってこい。」
「ハア…ハア……………はい……………」

クラスは静寂からまた騒がしくなった。特に、女子からだ。どんなに小さくなるうと、その容姿だけは変わらないようだ。そして、星河 スバルと視線が合う。いや、合わせた。すると、ウォーロックはタマモロマエの異質さに気づいた。

『おい、スバル。アイツのウィザードは何か凄げエぞ！
見たこともない波長の周波数だ……。
でも、何か俺たちと比べて古臭い感じがするぜ！』

そんな興奮気味なウォーロックを横目にスバルはうっとおしそつだ。

「はあ…分かったから、しばらく静かにしててよ……。」

スバルの素っ気ない態度に後押しされてウォーロックが動いた。

『あゝそうかよ。なら、アイツの端末に潜り込んでやる！』

スバルのハンターを飛び出してカルマの端末に飛び込もうとするが

……。直ぐに無駄だと分かった。カルマの端末のセキュリティだ。第一、カルマの端末はハンターではない。もっと、優れたテクノロジーによって生み出されたものだ。すると、タマモロマエが現れて中に入れてくれる。

『あら、あなたがウォーロックさん？英雄なんだってね。その背中のギザギザも素敵ね。』

てつきり、強そうなのが出てくるのかと思いきや……。まさか自分より少し小さい女狐が出てくるとは思わなかったのだ。

『お、おお、そうか。お前の周波数が気になって来たただけだ。で、率直に聞くが……。お前は、異星人なのか？地球産のウィザードにはとても思えねエ。』

少しタマモロマエも驚いた。こんなに早く気づくとは……。さすがは、最も初代使徒ファーストエンジェルに近いだけの事はあると。

『ん〜、その内分かるんだけど……。』
『なら、ちょっと、手伝ってくれるかしら?』

『手伝って何をだよ……。』 『じゃあ、放課後校門で。バイバイ。』

そして、ウォーロックは携帯端末から追い出された。

〔放課後……の前に昼休〕

寄ってくる人ばかりの処理に追われる俺……。
普通の女子生徒ならまだ、たち（・・・）がいいのだが……。
委員長とかいう生徒は非常にしつこいし偉そう……。
まあ、彼女なりにリーダーシップを発揮したいんだろう。

「……………というわけだから、私達もお手伝いするわ!」

委員長こと、白銀 ルナはスバルに便乗して引っ越しを手伝うらしい。

一応、この世界の引っ越しはまだできていないのだ。
それに、ウィザードに頼むのもめんどいし、

星河 スバルの事を色々調べたいしでこういうわけだ。
あ、ちなみに、新居は白銀のマンションだ。

（只今、作業中）

「ねえ、カルマ君？」「何だ、星河？」

ここで、ようやく当然して来るであろう質問を聞いてきた。

「何で、ウィザード使わないの？」「めんどいからだ。」

うん、本当の事だから仕方がない。
別に隠すような恥ずかしい事でもないしな。

『あ、それはあそこに置いてちょうだい。』 『おう！』

ウォーロックのやる気は十分だ。
それをスバルは不思議そうに見つめながらも作業は進む。

正直、リアルウェアブなどの素晴らしい技術はあるが
俺の携帯端末では非対応なのである。
買った物も俺の端末では読み込めない。
よし、ハンターV.Gとやらを買ってみよう！

「あれ、カルマ君はハンターを持っていないんですか？」

おお、ようやく気づいたかメガネ少年よ。

『ええ、訳ありだね。この端末を使ってるのよ。
それと、私の名前はタマモロマエね。』

さっきから、何気なく指図していたタマモロマエ。
実は、自己紹介まだだったりするのだ。
白銀は指図される側で不満げであったな……。
それでも皆、働いて作業は無事終了。
……いや、牛島のせいで物資が壊れかけた。

「よし、こんなもんでしょっ！」

これで、カルマ君との絆も深まったわね！

今日からあなたも、ルナルナ団の一員よ!」

その場にいた誰もが、『えっ!?!』となった……。確かに、俺の支持は転校してきたばかりなのに高い。それは、女子だけでなく男子にもだ。ルナルナ団にはもってこいの人材だろう。つまり、これが狙いだっただの。

「……あいにく、俺は縛られるのは嫌いだね。と、言いたいところだが手伝ってくれたしな。規律がないんなら加盟する。」

皆は固唾をのんで事の成り行きを見守っていたが、俺の承諾により一件落着となった。各々、解散して残ったのはスバルだけだ。

『じゃあ、私の秘密を教えてくださいようかしら。』

『おおっ！やっぱり、異星人なのか？
強いのか！？なら、俺とバトルしろ！！』

煩いウィザードをハンターに戻し、
スバルも気になるので尋ねてみる。

「ウォーロックも言ってたけど、
君は普通のウィザードじゃないの？」

『ええ、そうね。私は、元々ただの女狐だしね。』

「き、狐って、あの動物園にいる！？」

「そつだ。まあ、今となつては動物自体珍しいか。」

確かに、動物は激変した環境で絶滅寸前なのだ。
あの、カラスですら絶滅危惧種になっている。

『でもね。私は、特殊な女狐でね。

日本語を話せたとし電波も放っていたわ。

ああ、でも勿論肉体は普通の狐よ。』

「本来、動物と強化アーマーを融合させたもの
プロトタイプとしているんだ。

それを、強化アニマルと呼んでいる。

そして、俗に言うUMAと合成したものを

レジェンドシリーズと呼ばれ重宝されている。

最も、それらは数が少ない分希少価値が高い。

大抵、オリジナル以外は存在しない。」

『そうねえ、あなたで言う顔と腕輪の部分を骨格

として、それをくっつけた感じかしら。

でも、ちょっと違うわね。

動物が電波変換していると言ったところかしら?』

とんでも発言に混乱するスバル。
カルマとは一体何者なのか。
強化アニマル？レジェンドシリーズ？

「ちょ、ちょっと待ってよ！？」

カルマ君は何者なのさ？

ハンター持ってないし……。

ウィザードも普通じゃないし……。」

するとカルマは、険しい表情となった。
タマモロマエと目線を合わせ頷く。

「いいか、星河。近いうちに戦争が起こる。
いや、立て続けに起こるぞ。」

しかも、相手は地球の者ではない。

次元の狭間に住まう者達だ。

あらゆる戦力のぶつかり合いになるだろう。

あいつらは、この世界を侵略する気だ。

それに、俺らとは敵同士だからな

だったら、こっちと協力した方が得策だ。

もっと詳しい事は、追々話す。

明日、俺は休んでWAXAとコンタクトをとる。

……一般人には絶対言わないよ？」

『信じられないかもしれないけど、
すべて真実なの星河君。
とにかく大規模な戦争よ。
それこそ今までと比じゃないわ。』

「確かに嘘じゃなさそうだね……。
ぼ、僕はどうすればいいの？」

信じたと言ったものの、
内心混乱しているし半信半疑だ。

『なるほど。とにかく、敵を倒しやいいんだな？』

『そついつ事。物わかりがいいわね。』

カルマは少しため息をついて、
パニックッているスバルを落ち着かせる。

「……………落ち着け。」

今のお前は正直弱い。物凄く。

これは、偶然だがウォーロックは特別だ。
ファーストエンジェル
初代使徒に限りなく近い。

それに、星河にも才能がある。

他にも言いたい事は山ほどあるが…………。

WAXAから電波変換できる者を招集する。

うまくいったらメールする。

手伝ってくれてサンキューな。」

カオスな時間を過ごした星河少年。

一応、家に帰って記憶の整理をする事に…………。

〈スバルの部屋〉

『ワクワクするぜ！なあ、スバル！』

「はあ……また地球の危機が……。
僕、自信ないよ……。」

『何ほざいてんだスバル？』

また、スーパーヒーローになれるぜ？』

「君のポジティブな性格を僕にも分けてほしいよ。」

ため息をつくとき窓から空を眺めた。星空が綺麗だ。環境が目まぐるしく変わろうと北極星は動かない。北極星、見習おうかな……。すると、スバルのハンターに着信だ。どうやら、彼もハンターを買ったのかもしれない。

『星河スバル、明日の午前八時までにWAXAに來い。他のやつらにはWAXAの暁に送ってもらった。そうしないと信用しないからな。』

「ん、何か、全然実感わかないんだけど……。」

突然の『戦争始まります。』通達……。
しかも、本当にWAXA絡みの事態のようだ……。

『天災は突然やってくるものだけ！
まあ、俺にとっっちゃ天の恵みだがな！』

馬鹿ウィザードにつくづく呆れるスバル少年だった……。

二時間前……WAXAにて

『ここみたいよ日本支部。
どっしよつかしらねえ。
まともに聞いてくれそうにないわ。』

「ん、あそこの呼び鈴？でも押すか……。」

呼び鈴？的な物のディスプレイに触れてみる。
幸い、警備ウイザードはいなかった。

「こちら、WAXA日本支部です。
指紋認証をしてください。
お客様の場合、登録のための
パスワードを入力してください。」

「タマモロマエ、パスワードを探してこい。」

「ええ、分かったわ。
ちょっと、電腦に侵入してみる。」

タマモロマエが侵入して5秒程……。

端末に戻ってきた。

「分かったわ。」

パスワードはk o r e 0 5 1 3よ。

二回失敗するとブザーが鳴るみたい。

気をつけてよね。」

「いや、そんなミスはしねエ……」

「パスワードが違います。」

「……気をつけます……。」

ディスプレイの画面にコードを打ち込む。

「ピローン！」と音がした。

パスできたようだった。

そして、指紋を登録して入館する。

「一応聞くが、セキュリティに触れてないよな？」

パスワードを出すときに……「大丈夫！」

「ん、その少年はだれかな？
もしかして職員の子か？
いや、一般人はパスされないはず……。」

セキュリティは突破した。
後は、内部の人間と接触するだけだ。
そして、運よくシドウと出会えた。
まだ少し、足が不自由そうだ。

「言葉じゃ説明したところで無駄そうだ。
俺は電波変換もできる。
それに、この世界が大変な事になる。
それで、WAXAから招集をかけてほしい。」

勿論、こんな大の大人に言葉じゃ通じない。
即ち、俺のコードな文明を見せるしかないのだ。
少しの間奇跡を見せて星河と同じ話をした。

「信じられんな……。
なら、ここは長官や博士と話し合っしか……。」

いい感じに話は進んだ。
そして、指令室に向かったのだった。

〈指令室〉

幸い、この人間は頭が柔軟だった。
話はとんとん拍子で進んでいった。

「という訳で今回の件は承諾していただけますか？」

「ええ、あなたの言う事を信じるわ。

カルマちゃん。よろしくね。

それと、相談なんだけどいいかしら？

シドウちゃんのアシッドの話はしたわね？

そのアシッドを治せないかしら？」

「は、博士、それは無茶じゃないですか？」

そう。先の戦いでアシッドは致命的な傷を負った。肉体と精神が一致せずにいるわけである。つまり、『骨格』だけというわけだ。

「無理ではないですね。」

中身は本来の姿になるかはわかりません。まあ、多少弄ればなんとかなるでしょう。」

「博士、どういふ事ですか？」

「カルマちゃんの技術に頼るのよ。今のアシッドちゃんは骨格だけだわ。アシッドちゃんと動物を合成させるの。そして強化アニマルみたいにすれば何とかなるかもしれないわ。協力してくれないかしら？」

少し複雑な心境のシドウ。
生まれ変わったアシッドはやはり偽物。
それでも、戦わなければならぬ。
決心はついた。

「カルマ、頼んだぞ。」

これで、一安心のカルマ。

「はい。分かりました。」

まず、媒体となる肉体がいます。

第一、動物自体数が少ないです。

コスト費用もかかる。

何か、残留電波はないですかね？」

考え込む一同。

そして、長官が閃いた。

「それなら、メテオGから溢れた

データを使ってはどうか？
サンプルとして回収した物が
あるはずですよ。」

「プロトタイプから
試行錯誤してみましょう。
その前に、招集命令を。」

シドウがスバル以外の人員にメールを送る。

「そうだ、カルマちゃんの携帯端末に
ハンターV.Gのデータをいれちゃいましょう。」

「助かります。空きは相当あるんで。」

こんなやり取りが二時間の間にあったのだ。

プロローグ（後書き）

我ながらグダグダですね。

それ故に、意味不明になっている部分があるかもしれないです。

そのような部分は感想などで、ドシドシ質問してください！（ネタバレは不可です）

他にも、文法力などがどれくらい変わったのか知りたいので評価もつけていただけると幸いです。

他にもストーリーの感想（と言ってもプロローグですが）も待ちます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9404z/>

流星のロックマンF ダブルセンタース

2011年12月29日13時58分発行